



看護学生による情報通信技術を活用した遠隔予防的家庭訪問実習 ～コロナ禍での長期自粛生活による高齢者のフレイル予防～

大分県立看護科学大学

1. 地域が抱える課題と背景

COCを契機に2015年から実施している、看護学生による予防的家庭訪問実習では、看護学生が70歳以上の高齢者宅を定期的かつ継続的に訪問することで、協力者の健康維持をサポートするだけでなく、訪問活動で把握した地域課題について自治体等にフィードバックして情報共有を行ってきた。しかし新型コロナウイルス感染症の感染対策で地域活動が自粛される中、高齢者は外出する機会が減り、フレイルに陥る高齢者が増えている。また、自治体等としても高齢者の生活や健康状態の把握が困難になっている現状がある。

2. 目的

そこで本事業では、情報通信技術を活用して看護学生が高齢者と、遠隔で「訪問」に相当する実習を行う。これによって在宅高齢者の体調確認や健康に関する助言を行うことで、フレイル予防に資する可能性がある。さらに、情報通信技術を活用した交流（つながり）の効果を自治体等と情報共有することで、地域での新しい世代間交流の形を検討できる。

3. 事業実施経過及び内容

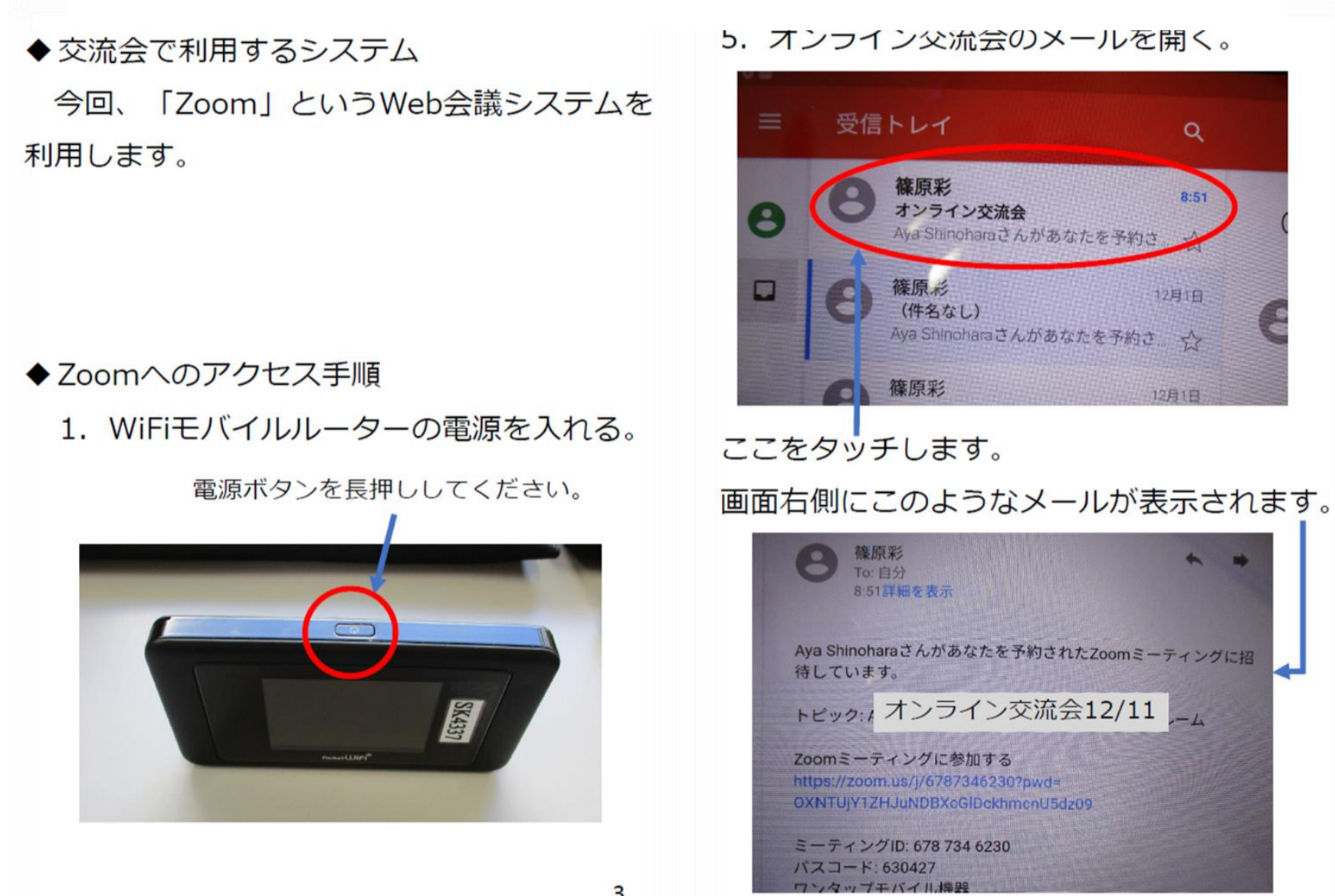
これまでの「予防的家庭訪問実習」協力者の中から上記対象者をリクルートする方向で準備を始めたが、端末機器の利用が難しい人が多いことがわかり、多くの協力者とオンライン交流をすることは難しいと判断した。そこで計画を修正して実習とは別の課外活動と位置づけ、協力者のうち自治会役員や老人クラブの役員を務める6名とボランティア看護学生8名、及び教員3名により、新しい形の世代間交流のあり方を探るためのオンライン交流会を実施することにした。

協力者にお渡しした



説明書の内容

流れを一つ一つ写真入りで説明した



協力者にWIFIモバイルルーターとタブレットを貸与し、自宅で1人でもZoomに入室できるようにパンフレットを作成して説明を行った上で、40分程度の交流会を3回実施した。実際には協力者の端末利用に際して、トラブル発生時の対応にサポートが必要であることや、Zoom機能を最大限利用するためには端末機器に慣れる時間が必要であること等がわかった。

第1回目交流会ではブレイクアウトルーム機能を使い、2グループに分かれて自己紹介を兼ねたゲームを行った。学生から自治会や老人クラブについて質問があり、協力者が活動の内容やコロナ禍の現状を説明した。第2回目は、連想ゲームと、マスクを着用していても表情豊かに過ごせるよう肩や首筋、表情筋をほぐす「顔面体操」を、全体で一緒に行った。参加した協力者から、簡単にできる運動なので老人クラブでも紹介したいという感想が寄せられた。第3回目は成人の日であったため、互いの成人式の日の思い出を話してもらった。協力者からは、既に働いていたため成人になったという意識はあまりなかったことや、今のような式典はなかったが新しいスーツとネクタイを着用した思い出等が語られ、当時の様子をうかがい知ることができた。昨年、成人を迎えた学生は、コロナ禍で式典が中止になったことや、感染対策のため飲食はできなかったが旧友と久しぶりに話せてうれしかったことが語られた。その後、成人年齢の18歳引き下げについて、異世代間で意見交換を行った。

4. 事業成果

学生有志は皆、異なる世代とのオンライン交流が初めてであったため、どのような会にすればよいのか心配しており、見方を変えればこのような形での交流にも関心が高いことがうかがえた。実際に参加してみると学生は非常に積極的で、協力者との会話や交流を大いに楽しんでいった。学生は地域活動に積極的に参加している協力者から、地域の現状や、協力者が地域を思う気持ちも知ることができたので、今回をきっかけに地域の高齢者の間でもオンライン交流の活用が進むことを願っていた。学生間でも、下級生が上級生のコミュニケーション力に刺激を受けたことが示された。ただし、高齢者とオンライン上でコミュニケーションを行うことの難しさを感じた学生もいた。

これを協力者側から見ると、ICT技術を使えば対面しなくとも世代間交流会や地域内交流会・会議等が開催できる可能性、そしてそのような技術を学生が使いこなしている現状を目の当たりにする機会となった。ただし端末のセットアップがうまくいかない場合もあり、技術的にいくらか課題が残ることも示されたが、とりあえず技術的可能性を地域のキーパーソンに体感してもらおうという狙いは達成できたと思われる。このような技術を使って何をするか、学生や地域の人々がそこにどのように参画するかは、別途の今後の課題である。

